

発刊のあいさつ

浦添市教育委員会 教育長 福山朝秀

浦添市教育委員会は、一九八七年度（昭和六十二年）より「琉球王国評定所文書」の刊行事業を開始し、以後事業を順調に推し進め、昨年度までに十三巻を刊行いたしました。琉球王国の近世史ひいては日本史を研究するにあたって、大変重要な文書との高い評価を受けながらも、これまで同文書は断片的にしか翻刻出版されませんでした。当教育委員会では、現在確認されている全史料を「琉球王国評定所文書」全十八巻として刊行する予定です。

浦添市は、古琉球時代もつとも早く王権が確立した地域です。したがって、古くから沖繩本島の政治・経済・文化の中心地でありました。「うらおそい」の古名で「おもろさうし」にも登場しております。また、中国や東南アジア諸国との貿易活動によって、琉球の「大交易時代」を担いました。このような歴史を持つ当市は、「国際性ゆたかな文化都市」をめざしており、市の文化事業の一環としての「琉球王国評定所文書」刊行事業を今後も推進してまいります。

今年度刊行の「琉球王国評定所文書」第十四巻には、内務省作成「旧琉球藩評定所書類目録」の通し番号で一五五八号・一五六四号・一五七二号・一五七三号・一五七八号・一五八二号、以上の六つの文書を収録いたしました。国立公文書館所蔵の一五七八号文書以外は、東京大学法学部法制史資料室所蔵の文書です。一八五六年（咸豊六年）から一八五九年（咸豊九年）までの四年間にまたがる史料群で、天久聖現寺から松尾へ住居を移したフランス人神父た

ちの行動や、琉仏修好条約（一八五五年締結）がきちんと履行されているかを確認するために再び来琉したゲラン提督のことや、オランダ船来着への対応方などを記した文書が含まれております。これらの史料が多くの市民をはじめ、研究者の間で活用されることを願っております。

最後に、本事業のために貴重な史料を提供し、また、刊行について御快諾下さいました、東京大学法学部法制史資料室ならびに国立公文書館の関係各位、また、史料の筆耕解読にご協力下さいました研究者各位に深く感謝申し上げます、
発刊の言葉といたします。

一九九八年（平成十年）三月吉日